

マイウェイ

No.135
2025

かながわのレトロ建築

監修 内田青蔵特任教授

スクラップ&ビルドからキープ&チェンジへ。
内田青蔵



表紙は、ジャック（横浜市開港記念会館）から見える
キング（神奈川県庁本庁舎）です。上の写真は、
四つの面すべてに時計が設置されたジャックの塔。

令和7年9月発行 ● 発行人 片岡達也 ● 編集人 田村正志 ● 発行 公益財団法人はまぎん産業文化振興財団 〒220-8611 横浜市区みなとみらい3-1-1 ☎045-225-2171（直通） ㈱神奈川新聞社

横浜の関内エリアには、明治・大正期から戦前までに建てられた古いレンガや石材を用いた大きな建物が数多く残ります。現代的なモダン建築とは一線を画すレトロなデザインで、馬車道、海岸通り、日本大通りなど独特のムードある街並みを形作っています。

今回は歴史的建築物の専門家で、人気TV番組「ブラタモリ」や「百年名家」などでも建築解説をされた内田青蔵特任教授（神奈川大学建築学部）にレトロ建築についてうかがいました。

構成・文：福田敬道、春名義弘、藤井賢治／デザイン：小山亜紀子／撮影：小林輝久、鈴木教之

かながわの レトロ建築

監修 内田青蔵特任教授

横浜郵船ビル 横浜市中区海岸通3-9、1936(昭和11)年竣工、横浜市認定歴史的建造物。



内田青蔵特任教授

神奈川大学建築学部建築学科特任教授。専門は日本近代建築史。著書『神奈川大学入門テキストシリーズ横浜建築』（共著）などで横浜の近代建築の歴史が分かりやすく解説されています。

る稀有な街です。

内田特任教授も「街全体がさながらレトロ建築の博物館です。しかも建物の内部まで見学できるところがいくつもあります。これだけの貴重な歴史遺産を（多くが無料で）観られるというのは全国的にもめずらしいんですよ。ぜひ散策してみてください。」と建築散歩を勧めます。

明治の大型建築はメディアだった

レトロ建築といえは、装飾物やレリーフなどの飾りものが随所に施され、建物全体から放たれる圧倒的な重厚感、あるいは威圧感が魅力のひとつ

街全体がレトロ建築博物館

今年（2025年）5月に「横浜市中区海岸通りの横浜郵船ビルを来年秋にホテルに改装する」ことが発表されました。横浜郵船ビルといえば戦前の竣工で、高い柱がずらりと並ぶギリシャ神殿のような風格ある建物です。こんなホテルならぜひ泊まってみたいと思わせる魅力があります。また、横浜郵船ビルから徒歩5分ほどの馬車道通りには、石造りの神奈川県立歴史博物館（旧横浜正金銀行本店）が威容を誇ります。

このように横浜の関内エリアは、ほんの3^{キロ}圏内に戦前までに建てられたレトロな大型建築物がいくつも残



横浜異人館之図 浮世絵:1866(慶応2)年、一川芳員(歌川芳員)。神奈川県立歴史博物館所蔵。建物:ベランダや石張りの外壁、2階の窓には鐵戸(よろいど)が付いた洋館ですが、屋根は瓦ぶきのような日本風です。和洋折衷のデザインから棟梁の苦心がしのばれます。



山手資料館 中区山手町236、1909(明治42)年竣工、木造2階建、横浜市認定歴史的建造物。築100年を超える建物自体の美しさに加え、資料館の展示物や前庭のバラなど見どころが満載で「明治時代のモダン」を満喫できるスポットです。



神奈川県立歴史博物館(旧横浜正金銀行本店) 横浜市中区南仲通5-60、1904(明治37)年竣工、国の重要文化財。石造のコリント式の巨大な角柱を2本並べ、屋上には大ドームを配したエントランスなど本格的な様式建築で、戦前には世界三大為替銀行の一角にあった横浜正金銀行本店らしい重厚なたたずまいです。博物館は2026年9月まで工事のため休館中。

です。

「建物が造られた明治から大正期は、日本が新しい国づくりに邁進していた時代ですが、新聞などのメディアが今ほど行き渡っていなかったため建物自体に存在感という力を持たせて国内外にアピールしたのでしょう。いわば建物自体がメディアだったんですね。」と教授は資料写真を広げながら時代背景を解説します。

明治時代の棟梁の心意気

「大きな建物が建設されるのは明治中期以降です。それより以前の明治初期には西洋建築を設計できる人

材がまだ育っていなかったもので、大工の棟梁が請け負って、日本の建築技術を駆使して西洋風の建物を建てました。現在では擬洋風建築と呼ばれています。明治初期の建物はほぼ残っていないものの、その姿は明治時代に描かれた横浜浮世絵に観ることができます。洋風建築なのですが、一部に中華風な意匠を施したものがあつたり、独特の世界観が興味深い時代のあだ花のような建築物です。

また、山手資料館(横浜市中区)は唯一現存する明治末期の木造住宅の洋館部分です。戸部町(横浜市区)の棟梁が手がけたものですが、擬洋風ど

ころか本格的な木造洋館なので、この棟梁は独自で相当勉強したんでしょうね。棟梁の心意気を感じます。」

国家の意志と建築家の情熱

「明治10年代になると英国から建築家を招聘して建築家教育が本格化したり、海外で学んだ日本人建築家が帰国したりして、擬洋風ではなく西洋の建築様式にのっとった建物が増えてきました。帝国主義の時代に国の独立を保つためには、本格的な西洋建築を日本人の手で造り、一等国とみなされるのが必須だと考えたのです。」

建物も国際化のための重要なツ

関内レトロ建築MAP

- 1 横浜指路教会
- 2 損保ジャパン日本興亜馬車道ビル
(旧川崎銀行横浜支店)
- 3 神奈川県立歴史博物館
(旧横浜正金銀行本店)
- 4 馬車道大津ビル
(旧東京海上火災保険ビル)
- 5 東京芸術大学横浜キャンパス
(旧富士銀行横浜支店)
- 6 横浜銀行協会
(旧横浜銀行集会所)
- 7 横浜アイランドタワー
(旧横浜銀行本店別館)
- 8 北仲ブリック&ホワイト
(旧横浜生糸検査所附属倉庫)
- 9 横浜第2合同庁舎(旧横浜生糸検査場)
- 10 横浜郵船ビル



- 11 横浜税関
- 12 JAグループ神奈川ビル
(旧神奈川県産業組合館)
- 13 横浜貿易会館・横浜海洋会館
- 14 横浜開港資料館
- 15 横浜海岸教会
- 16 神奈川県庁本庁舎
- 17 三井住友銀行横浜支店
(旧三井銀行横浜支店・休館中)
- 18 横浜市開港記念会館
- 19 横浜地方・簡易裁判所
- 20 横浜情報文化センター
(旧横浜商工奨励館)
- 21 横浜都市発展記念館
(旧横浜市外電話局)
- 22 KN日本大通ビル
(旧横浜三井物産ビル)
- 23 THE BAYS
(元日本綿花横浜支店倉庫)



横浜市開港記念会館(ジャックの塔)
横浜市中区本町1-6、1917(大正6)年竣工、国の重要文化財。
外観は大正期に流行った軽快なフリー・クラシック様式で、内装は関東大震災後に修復されたため昭和初期のセンスが生かされており、二つの時代を味わたる貴重な建築物です。



までオーダーメイドされた特別室など、大正期の最先端のスポットとして市民が誇れる建築デザインになっています。

1923(大正12)年の関東大震災

ルだったのです。
「当時と現代では、建築図面の枚数も段違いなのです。現代の建築では、天井や床はパネルなどの既成建材を指定するだけなので簡単な図面となりますが、当時は天井も床もドアノブ一つに至るまで、すべて図面が描き起こされました。ガラス一枚でも特注品として図面を引いた明治期の建築物には、建築家の意志や情熱が細部にまで宿っている気がします。」

大正時代に施された耐震施工

関内エリアでレトロ建築を散策するのなら、はじめにジャックの愛称で

おなじみの横浜市開港記念会館がお勧めです。ボランティアガイドが館内を無料で案内してくれます(ガイド休止の日あり)。

この建物は、横浜開港50周年記念事業の一つとして、1917(大正6)年に市民の寄付金をもとに造られました。赤いレンガと白い花崗岩のツートンカラーで彩ったスマートな外観、見上げれば時計塔、角塔、八角塔がそびえ、建物内に入ると教会のように高い天井を大理石の柱が支えるロビー、ステンドグラス越しに七色の陽光が降り注ぐ階段、演説会や舞踏会が開かれた大講堂、調度品

で被災し、内部は焼け落ちたものの時計塔と壁体は崩れずに残りました。これはレンガ積みと壁体に帯鉄などを入れる独自の耐震補強を施していた功績です。

館内ガイドでは、こうした建築内部の工夫も実物を見ながら解説してくれるので、一層、理解が深まります。

横浜市内に限らず、県内のあちこちにも見学できるレトロ建築が意外と多く残っています。

この季節の気持ちのいい一日に、ぜひ街を散策しながらレトロ建築を体感してみませんか。

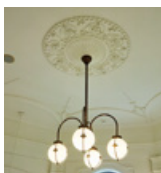
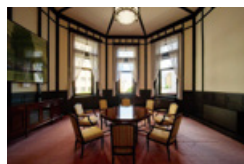
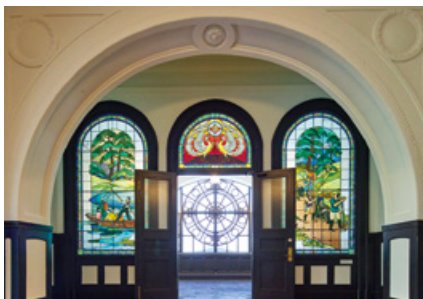


講堂「文化の殿堂」として国内外の著名人によるリサイタルや講演が催され、内装も豪華で手の込んだしつらえです。ステージ上部の一字幕には、貿易船と重要な輸出品だった絹糸の束の刺繍アートが施されています。(講堂内は催しがない時間帯だけ見学できます。)



2階ホールのステンドグラス

中央開口部の上には鳳凰と横浜市の徽章が飾られ、両脇に渡し舟「呉越同舟」と「箱根越え」が描かれています。ステンドグラスはここ以外に階段ホールの2カ所にも飾られています。



天井のレリーフと柱頭の装飾

漆喰のこて絵による天井のレリーフ(左)やロビーのイオニア式柱頭(右)など、館内にはいたるところに装飾が施されて、美術展を観るような楽しさがあります。



来賓用階段と特別室

八角塔の1階部分は、来賓用の南玄関として設計され、ステンドグラスが迎える階段を上り八角塔2階の特別室に続きます。



横浜市開港記念会館 (ジャックの塔)

レトロ建築
見比べ散歩

1

横浜市中区本町1-6、1917(大正6)年竣工、国の重要文化財ほかに認定。見学時間9時～18時、第2水曜日・年末年始休館。

内

田特任教授は、スクラップ＆ビルドという概念に対して、

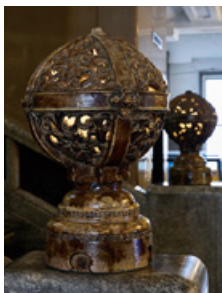
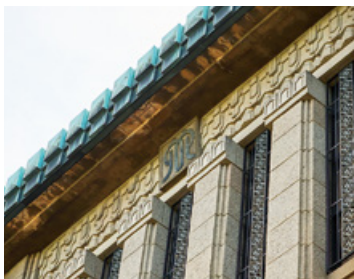
既存の建物を新たに活用するキープ(維持)&チェンジ(再利用)という考え方を提唱しています。確かにレトロ建築の活用は、キープ&チェンジの最たるものかもしれません。ここでは歩いて見比べ見学できる3件のレトロ建築を紹介します。



横浜市開港記念会館のシンボルでもある、高さ約36mの時計塔は「ジャックの塔」という愛称で、キング(神奈川県庁本庁舎)、クイーン(横浜税関)と並び「横浜三塔」と呼ばれ、市

民に愛されています。近代化した日本を象徴する「東洋一の港・横浜」の顔として、横浜港の船上から見られることを意識した都市景観の構築です。横浜市開港記念会館は、関東大震災や戦災でも建物の躯体が奇跡的に残り、今でも現役の公会堂施設として活用されていて、大阪市中央公会堂とともに大正期二大公会堂建築と呼ばれています。

この建物は歴史的にも建築的にも、見どころ・聞きどころが満載ですから、ぜひボランティアガイドをお願いし、貴重なレトロ建築を細部まで堪能してください。



和洋折衷のデザイン
外壁の装飾は直線的な幾何学模様が特徴のアル・デコ調(上右)で、ロビー(上左)に入ると仏教美術に見られる宝相華文様(ほうそうげもんよう)を立体化した装飾灯(左)や階段グリル(右)など東洋風のデザインが生かされています。



歴史展示室とキングの塔 6階の歴史展示室(左)では、建築時の図案など貴重な資料が展示され、図案段階ではキングの塔がもっと高かったことなどが分かります。



神奈川県庁本庁舎

(キングの塔)

レトロ建築
見比べ散歩

2

横浜市中区日本大通1、1928(昭和3)年竣工、国の重要文化財ほかに認定。6階の歴史展示室と屋上展望台のみ8時30分から17時15分まで見学可。土日祝日、年末年始は閉庁。

再現するだけでなく、日本的な美意識を生かしたデザインが台頭し始めたのです。特に屋上に和風の塔と屋根根を設えた帝冠様式は昭和初期の公共建築で多数採用され、県庁本庁舎はその先駆けとなりました。まさに「キングの塔」と呼ばれるのにふさわしい威風堂々とした外観デザインです。

県庁本庁舎6階の歴史展示室と屋上は、開庁時間帯には自由に見学できます。屋上に出てキングの塔の大きさを目の当たりにし、振り返って横浜港を一望しながら、日本と横浜の近代の発展ぶりに思いを馳せてみるのも一興かと思えます。

横 浜市開港記念会館のようなレンガ造の外観は、明治・大正時代に流行しましたが、1923(大正12)年の関東大震災でレンガ造の多くが倒壊したため、以後はコンクリート造が主流となりました。1928(昭和3)年竣工の神奈川県庁本庁舎も鉄骨鉄筋コンクリート造です。二つの建物の竣工年の差はわずか5年ほどですが、この間の建築工法の大きな変化が見て取れます。

また震災により横浜港の貨物取扱量も一時減少したため、建築デザインにも独自性を出して都市全体の復興を目指しました。西洋の建築様式を



歩道と街路樹帯が車道よりも広い日本大通り(右)。エレガントな曲面の角はカフェの入口で、建物のエントランスは日本大通り沿いにあります。



大木のような大理石の柱を構える階段(上左)を上ると、2階のホール(上右)や3階の日本の伝統的意匠を用いた貴賓室(左)が見学できます。

取り囲む形で、2000(平成12)年に横浜情報文化センター、2003(平成15)年に横浜都市発展記念館の2つの建物として生まれ変わりました。

築80年以上を経て中性化した旧横浜商工奨励館のコンクリート部分は、内部の鋼材を腐食させる可能性がありました。あえて建物は解体せずコンクリートへの電気化学的な処置で再アルカリ化する特殊な工法により、貴重な歴史的建造物がそのまま活用できる形で保存されたのです。

経年劣化を最新の技術で乗り越えたこの事例は、キープ&チェンジの模範例のひとつではないでしょうか。



横浜情報文化センター (旧横浜商工奨励館)

横浜市中区日本大通11、1929(昭和4)年竣工、横浜市認定歴史的建造物。旧横浜商工奨励館の共有部分は10時から17時まで、3階の貴賓室は15時まで見学可。月曜休館、月曜祝日の場合翌平日が休館。



横

浜港の象の鼻エリアと横浜スタジアムを真つすぐに結ぶ日本大通りは、明治初期に整備された日本初の西洋式街路です。

車道の両側に広い歩道とイチヨウ並木の街路樹帯が開かれ、街路樹の向こうには歴史的建造物が建ち並びます。その異国情緒あふれる通りの中ほどの角地で、優美な曲線を描く建物が旧横浜商工奨励館です。館内のカフェやレストランに席を求めれば、歴史的建造物のスケールをさらに実感できるでしょう。

この旧横浜商工奨励館と隣接する旧横浜市外電話局の二つの歴史的建造物は、後方の地上12階建ての新館を

2 湯浅物産館

鎌倉市雪ノ下1-9-27、1936(昭和11)年竣工、国登録有形文化財、鎌倉市景観重要建築物等。

鎌 倉鶴岡八幡宮の参道で営業する湯浅物産館は、関東大震災後に流行した看板建築（木造の建物の前面に看板を兼ねた外壁を設置し西洋建築風に見せた建物）というレトロモダンな店舗建築です。屋内も中央部の吹き抜けなどの特徴的な設計で、1階奥のカフェや2階の写真スタジオを利用することで観ることができます。



写真提供:神奈川新聞社



3 レストラン MOKICHI KAMAKURA (旧鎌倉加圧ポンプ所)

鎌倉市長谷4-6-12、1936(昭和11)年竣工、国登録有形文化財、鎌倉市景観重要建築物等。

元 は上水を加圧送水するための水道施設でした。鉄筋コンクリート造平屋建てで、外壁は、大正末期から昭和初期に流行したスクラッチタイル張り、腰部はモルタル塗り擬石仕上げの建物です。現在は熊澤酒造の直営レストラン「MOKICHI KAMAKURA」として営業しています(火曜定休)。



写真提供:神奈川新聞社

4 星野写真館本店

鎌倉市腰越3-14-2、大正末期から昭和期にかけて段階的に建築。

星 野写真館本店も鎌倉の著名な看板建築です。正面2階に二つ並んだ当時流行していた丸窓や入口上部を飾るステンドグラスがレトロモダンな風情を感じさせます。写真館のため、2階の写真スタジオ部分の側面の開口部は全面ガラス張りとし、採光がふんだんに採れるようにデザインされています。



県内

レトロ建築ガイド

レトロ建築の多くは横浜市中区に集中していますが、県内各所でもいくつか現存しています。自治体が管理し公開しているものや、飲食店として営業するものなど、見に行きやすいものをいくつか紹介します。



1 田戸台分庁舎 (旧海軍横須賀鎮守府司令長官官舎)

横須賀市田戸台90(海上自衛隊横須賀地方隊敷地内)、1913(大正2)年竣工、日本遺産。

横 須賀鎮守府とは、大日本帝国海軍時代に横須賀海軍区を統率していた機関です。長官官舎として応接室や20人掛けのダイニングルームなど公館としての機能を備えた洋風部分と、居室空間としての和風部分が融合した建築です。通常は非公開で、年に1～2回程度一般公開日が設定されます(次回の公開日は未定)。



8 カフェいがらし (旧五十嵐商店)

秦野市本町2-4-9、1925(大正14)年竣工、国登録有形文化財。

秦野は江戸時代から葉タバコの栽培が盛んで、明治39年に秦野・二宮間の湘南軽便鉄道が開通したことで、葉タバコの集積地として繁栄しました。秦野の商業地四ツ角周辺では、西洋古典様式やアールデコ様式などの影響を受けた建物が多く残され、旧五十嵐商店はその代表的な建築のひとつです。日曜定休。



9 海老名市温故館 (旧海老名村役場庁舎)

海老名市国分南1-6-36、1918(大正7)年竣工、国登録有形文化財。

玄関ポーチや濃い色で縁どった縦長窓などがハイカラな印象を与えます。明治から大正時代の地方庁舎によく見られる左右対称の木造下見板張りの建築で、関東大震災でも倒壊せず、現存する県内最古の役所建築として当時の姿を伝えています。2011(平成23)年に当地に移築されました。年末年始休館、ほか臨時休館あり。



10 旧中村家住宅

相模原市南区磯部1734、幕末ごろの竣工、国登録有形文化財。

擬洋風建築の旧中村家住宅主屋は、幕末期に建てられたもので、明治以前の擬洋風建築が残されているのは全国的にも貴重な例です。1階部分は和風建築で、2階部分が海鼠壁に縦長の窓が開けられた洋風建築です。しかも建築当初は3階建てでした。鎌倉の大工の棟梁石井甚五郎が10年の歳月をかけて建てたと言われ、板に描いた設計図も残されています。月～水休館(祝日は開館)、年末年始休館。



3階建て当時の写真。現地の案内板より転載。

5 八幡山の洋館 (旧横浜ゴム平塚製造所記念館)

平塚市浅間町1-1(八幡山公園内)、1905(明治38)年竣工、国登録有形文化財。

日本火薬製造の支配人執務室として明治時代に建設され、大正期に日本海軍の施設などを経て、戦後横浜ゴムが取得した後、平塚市に無償贈与されたものです。現在は歴史的建造物として見学が可能で、会議室などを予約利用もできます(登録制)。月曜休館(休日の場合直近の翌平日が休館日)、年末年始休館。



6 レストラン大磯迎賓館 (旧木下家別邸)

大磯町大磯1007、1912(大正元)年竣工、国登録有形文化財、景観重要建造物。

JR大磯駅前に建つ瀟洒な洋館が大磯迎賓館です。日本での住宅建築では最初期と思われるツーバイフォー工法を採用し、関東大震災でも倒壊しなかった希少な木造レトロ建築物です。切妻造スレートぶきの屋根や各部屋の出窓、玄関ポーチ上部のバルコニーなど、大正モダンを感じさせる別荘建築です。水曜定休。



7 中央労働金庫小田原支店 (旧明和銀行本店)

小田原市本町2-1-23、1928(昭和3)年竣工。

ゆるやかな曲線を描く角面が印象的な銀行建築の典型のような建物です。外側に並ぶ付柱や縦長の窓など古典建築風でありながら、装飾が少なくモダンさを感じます。これは昭和建築の特徴で、明治建築の豊かな装飾に代わってシンプルな明快さが表現されているのです。



欧州の先駆的な取り組みを視察。 「日本も引けを取らない。 自信を持って自社を語ろう。」

第51回神奈川県中小企業技術者等海外派遣団参加

厚木市 堀硝子(株) 近藤繁宇さん

全国の事業所へ出張の連続

弊社堀硝子は、厚木市の大規模開発地区「森の里東地区」に本社を置く自動車部品等製造会社で、ガラスを自動車に取り付けるアッセンブリ事業などを行っています。組み付け

しづらいガラスを独自の接着剤を使った技術で、ニーズに合わせた工程を提案しています。いわば「ガラスを作らないガラスの専門家」です。

私は入社して12年。現在は、工務部生産技術課の係長として後進を育成しつつ、取引先の自動車メーカー



生産ライン設計の参考に、本社のベテランオペレーターにも意見を聞きます。



自動車のフロントガラスへの接着技術を説明する近藤さん。本社ショールームにて。



「ものづくりの*当たり前。を改革する」堀硝子本社スタッフの皆さん。

が新車生産を立ち上げる際に新しい生産ラインをつくる仕事をしています。本社以外に全国に10カ所ある事業所を回っており、出張の連続です。派遣団参加は職場の先輩に続いて弊社では2年連続ですが、SDGs(持続可能な開発目標)など圧倒的に進んでいる欧州に学びたいと社内募集に手を挙げました。

IoTなど先駆事例を目のあたりに

ドイツ・イタリアの企業7社を視察しましたが、いずれもIoT(モノのインターネット)やインダストリー4.0(IIT技術を取り入れた

第4次産業革命)、DX(デジタル技術活用による変容)へ先駆的な取り組みを進めている企業です。ドイツのソミック社(梱包装置製造)では、倉庫に何列にも配置された部品棚からQRコードでコンテナを検出するの確に搬出するシステムを視察しました。AIを駆使し、無数のトレーが縦横無尽に、かつ効率的に動き回っていました。自席のモニターで図面と組み立て手順が見られ、ペーパーレス化も進んでいました。人手不足は日本とも共通する悩みですが、業務の自動化・効率化で解決した好例です。インダストリー

海外派遣事業のご紹介

国際的視野の広い中小企業青年従業員の育成を目的として、神奈川県との共催により昭和45年「神奈川県中小企業技術者等海外派遣事業」を、また平成元年に「神奈川県商業従業者海外派遣事業」を開始し、継続実施しております。現在まで、中小企業技術者等派遣事業に969名、商業従業者派遣事業に254名の方々が派遣団員として参加され、欧州の先進国で貴重な視察研修を体験されています。応募要領等詳しくは、ホームページをご覧ください。



近藤繁宇(こんどう・しげたか)
1987年生まれ。愛川町在住。「今回の視察で得たアイデアやヒントを業務に生かして、工程に無駄がなく、生産性が高いと皆に言われるような生産ラインをつくりたいです」

第51回神奈川県中小企業技術者等
海外派遣団 視察先

ミュンヘン（ドイツ）

- ① ホフマン&ヴラトニー社
(切削工具メーカー)
- ② ソミック社
(自動包装機器システムメーカー)
- ③ グロブヴェルク社
(工作機械メーカー)

モデナ（イタリア）

- ④ ストンビー社
(防御装置メーカー)
- ⑤ SPT社
(自動車部品製造)
- ⑥ インダコプロジェクト社
(ソフトウェア開発)
- ⑦ バガーニ・アウトモビリ社
(完成自動車製造)



視察中は、ガイドの通訳とともに、各分野の専門知識を持つ団員が、日本との比較例などを解説してくれます。



日本からの土産を広げる
視察先の社長。イタリア
のストンビー社にて。



視察先の社長と記念写真。ドイツ
のホフマン社にて。



夕食後、ミュンヘンのピアガーデン
に繰り出した一行。



男性技術者ばかりの団員だけに、モデナのフェ
ラーリ博物館に大興奮。

4・0を推進する企業に対して、ド
イツ政府が法人税を軽減すること
にも驚きました。

イタリアのSPT社（自動車部品
製造）では、部品加工ラインにロボ
ットによる自動運転を導入し、AG
V（無人搬送車）も25年も前から稼
働していました。一方で、新入社員
には16時間の安全教育を受けさせる
そう、安全意識に対する強い思い
が伝わってきました。

ドイツのホフマン社（切削工具製
造）では、設備投資を惜しまず毎年
のように最新の機械を導入してお
り、一度買った機械の改造を重ねる

ことに慣れている私の目には新鮮に
映りました。

SDGsの観点では、どの企業も
近場のメーカーから部品調達をし、
輸送に伴うCO₂削減を図っていま
した。製品加工の工程で発生する熱
エネルギーを工場の暖房に充てる会
社もあり、今後のSDGs推進のた
めに大いに勉強になりました。

自社製品への誇り

ドイツもイタリアも、社員を資源
として大切にし、それが離職率の低
さにつながっているのが伝わってき
ました。また、非常に印象的だった

のは、案内してくれた方々が皆、自
社製品に強い自信と誇りを持って
堂々と語る姿です。正直に言って、
今回見たもののなかには日本も引け
をとらない技術が多くありましたが、
「自信を持って語る」という点は学ば
なければと思いました。



〔会社情報〕
堀硝子株式会社
代表取締役社長 高本勝己
本社：厚木市森の里紅葉台3-1
<https://www.horiglass.co.jp/>